

[書評]

Leszek Moszyński
WSTĘP DO FILOLOGII SŁOWIAŃSKIEJ
 Warszawa: Wydawnictwo Naukowe PWN, 2006. 409 pp.

野 町 素 己

「スラヴ学入門」あるいは「スラヴ・フィロロジエ入門」という科目は、どのスラヴ語を研究するにせよ、研究に必要な常識的な知識を得るための科目であり、通常スラヴ学を専攻する大学の1年次での必須科目とされている。しかしこれは「基本的」な科目であるにもかかわらず、各国の伝統により、またその科目を担当する研究者次第で、さらには時代によって内容や比重がずいぶんと異なるようである。

「スラヴ・フィロロジエ入門」と題した本は数多く世に出たのだが、その例を幾つか挙げてみよう。スロヴェニアの著名な文献学者Rajko Nahtigalは、1949年にUvod v slovansko filologijoを上梓した。この本は主にスラヴ・フィロロジエの定義と歴史を簡潔に述べるにとどまっていて、明確な方法論の説明を欠き、また内容も断片的であるのでスラヴ・フィロロジエ入門とは言いがたい内容であった。事実Александар Белићは、その書評で内容の不足を手厳しく批判している。¹ チェコのスラヴィストRadoslav Večerkaは、1977年にZáklady slovanské filologie a staroslověnštinyという著書を出版した。この本は、上述のNahtigalの著書とは異なり、この学問の歴史は全く触れられず、スラヴ祖語と古代教会スラヴ語の言語学的概説に終始している。一方ベラルーシのスラヴィストАдам Супрунが1981年に出したВведение в славянскую филологиюでは、スラヴ祖語及び教会スラヴ語については、やや簡潔に述べられ、むしろ現代スラヴ諸語の概観、スラヴ人の歴史、スラヴ語による文献の発生、そして特徴的なのは20世紀後半までのスラヴ語研究の歴史が紹介されている。この著書は上の2冊と比べて「スラヴ学」を広く見通しているとはいえ、「文献研究」という本来の意味における、あるいは狭義の「フィロロジエ」の入門書とは言えず、むしろより広い「スラヴ学」の入門書である。本稿で取り上げるLeszek Moszyński氏のWstęp do filologii słowiańskiejは、以上に挙げた3冊とは異なり、主に古い時代に書かれたテキストを読み解くという、伝統的な「文献学」という意味での「フィロロジエ」の入門書である。²

¹ Јужнословенски филолог, XVIII. С. 245-252 を参照されたい。

² ここでは踏み込まないが、英語圏にも優れた入門書が幾つかある。その一つとして、Alexander M.

まず、この *Wstęp do filologii słowiańskiej* の著者について簡単に触れておく。Leszek Moszyński氏は、主にポーランドのコペルニクス大学（トルン）およびグダンスク大学（グダンスク）を中心にしながら、全スラヴ圏で広く活躍したスラヴィストである。ポーランド、スロヴェニア、マケドニアなどの学士院の会員であり、国際スラヴィスト会議の教会スラヴ語研究部会では指導的な役割を担い、名実ともに 20 世紀最大のスラヴィストの 1 人と言っても過言ではない。Moszyński氏の学術活動は実り多いもので、1998 年に出版された氏の生誕 70 年記念論集によれば、主にスラヴ文献学とスラヴ祖語の研究に捧げられたその学問業績は 300 点をゆうに超えており、どれも高い評価を得ている。中でも、スラヴ諸語におけるいわゆる *mazurzenie* (сакаwизм, цокание) の研究 *Wyrównania deklinacyjne w związku z mazurzeniem polskim, ruskim, połabskim* (1960 年刊)、ゾグラフィオス写本の文献学的研究である *Język kodeksu zografskiego* (第 1 巻：名詞、1975 年刊および第 2 巻：形容詞・数詞・代名詞、1979 年刊) は有名である。³ 本書にも非常にしばしば、自身の研究とその貢献について言及されているので、「入門」というタイトルではあるが、氏の広い知識と数多くの経験が統合された研究書でもあるとも言える。なお、本稿執筆者はワルシャワ大学の西・南スラヴ学科およびベオグラード大学のスラヴ学科にて「スラヴ学入門」の講義に年間を通して聴講する機会を持ったが、いずれの大学においても、本書は必読参考文献とされていた。

では、本書の内容に移ろう。紙面が限られているので、概略的紹介とそれに関連して気になった点をいくつか挙げるに留めることにする。

本書は 1984 年に出た第 1 版の改訂版であるが、初版と比べてみて、構造および内容の大きな変化は見当たらない。第 1 版も第 2 版も項目数は合計で 293 項目であり、項目の名称も同一である。ページ数は第 1 版 343 ページに対し、第 2 版は 408 ページと大幅に増えているように見えるが、これは各項目における参考文献、最新の研究についての補足されたこと、実例としてのテキストや写真が増えたこと、さらにフォントが大きくなってページ数が増えたことが主な理由である。二つの版の違いとして、項目同士の内容の関連がする場合には、項目の脇に関連項目の数字が挙げられ、すぐに参照できるように工夫されているが、これは初版にはなく、歓迎すべき改良点である。

なお、第 1 版と第 2 版の違いとして一言語学的というより政治的あるいは社会学的なことだが一その扱う「言語」の違いが生じている。よく知られているように、かつてのセル

Schenker による *The Dawn of Slavonic: An Introduction to Slavic Philology* が挙げられる。この本はモシンスキ氏の著書同様に歴史、言語、文字という章からなるフィロロジーの入門書である。

³ なお、Moszyński 氏の詳しい業績については、例えば氏の記念論集 *Tematy: Księga jubileuszowa w 70. rocznicę urodzin Profesora Leszka Moszyńskiego* (1998, Gdańsk)、あるいは Кирило-методиевска енциклопедия (София, 1995) の Мошински の項目などを参照されたい。

ビア・クロアチア語は、現在では現地の言語学者を中心に、セルビア語、クロアチア語（さらにはボスニア語、モンテネグロ語など）と別の言語として記述されることが増えてきた。本書も同様の処置がとられ、この「2つ」の言語の例が別々に挙げられている。しかしクロアチアのチャ方言、カイ方言がセルビア語ではないにしても、⁴ 文語のレベルに限って言うならば、「両」言語とも、基本的には新シュト方言をベースにした、そして後に地方的変種を許容するタイプの文語として発展した両民族の共通の文語の役目を担ってきた言語である。したがって、文語レベルとしての「両」言語の例は、非常にしばしばほとんど同じになるのは、ある意味当然であり、別々の例として挙げるが無意味にさえ思われることもある。さらに注意すべきことだが、現代セルビア語文語の規範は、主流のエ方言だけではない。イエ方言も同等の地位を持ち、それに基づいた文法書や正書法なども出版されている。しかし本書での例の挙げ方に従うならば、イエ方言の例がクロアチア語、エ方言の例がセルビア語になってしまう。したがって、方言的な差異を示す場合以外に、この二つの言語の文語からの例を、別個の言語の例として挙げる必要はあまりない。

本書は2部構成となっている。「文字とテキスト」と題された第1部および「言語」と題された第2部である。さらに第1部は3章（「文字」、「スラヴ語による文字とテキスト誕生の歴史的背景」、「テキスト」）からなり、第2部は2章（「スラヴ祖語」、「教会スラヴ語」）となっている。

第1部1章「文字」では、スラヴ人がキリスト教受容以前に文字を持っていたかどうか、宗教と文字の関係、ラテン文字の受容と適用、キリル文字、グラゴール文字について説明されている。ラテン文字の受容に関して、本来のラテン文字とスラヴ語に適応させた複合文字の特徴を、スロヴェニアのフライジング文書の解釈の比較（Ramovš の解釈と Issatschenko の解釈）をはじめ、古代チェコ語、古代ポーランド語、古代クロアチア語で書かれた具体的な言語材料を用い、相互に比較し、その発展をくわしく解説している。ラテン文字を用いるスラヴ語において、15世紀の Jan Hus の文字改革が極めて重要であることは周知の事実だが、Hus の文字改革に比べるとあまり知られていないポーランド人 Jakub Parkoszwic が試みた文字改革についても言及し、正当な評価を与えている。これはポーランド人向けの本であるからというのもあるが、ポーランド人に限らず、あらゆるスラヴ研究者に興味深いことである。

続いてキリル文字、グラゴール文字の古文書学的な解説がある。各々の字の成立と発展、ギリシャ文字との関係などである。新たに付け加えられたキリル文字のグラゴール文字と

⁴ しかし、優れたセルビア・クロアチア語研究者であった С. М. Кульбакин のように、セルビア語＝セルビア・クロアチア語であり、チャ方言、カイ方言も「セルビア祖語」から発達した「セルビア語の方言」であるという立場を取っているものもあった。ただ、このような記述は明らかに行き過ぎであり、ある種の誤解を生む。Кульбакин С. М. Сербский языкъ. Полтава, 1917, С. 5.

ギリシャ文字との関係については、キリル文字を通してグラゴール文字に文字が増えたと考える E.Ф. Карский とその逆である Н.С. Трубецкой の見解が比較・紹介されている。

キリル文字とグラゴール文字のどちらがより古いかという問題は、スラヴ学においてさまざまな議論があった。今日ではグラゴール文字がより古いということがほぼ定説になっている。Moszyński 氏は、ただそれを繰り返すだけではなく、再使用された羊皮紙に残った文字、グラゴール文字の文書に書かれたキリル文字のメモ書きなどといった物理的特長、数字を表す文字の使い方、文字の名前などといった特徴、そしてグラゴール文字で書かれた文書の言語特徴など 8 つの視点からグラゴール文字がキリル文字よりも古いことを具体的に説明している。ここではポーランドにおけるグラゴール文字の運命、スラヴ典礼の存在の可能性など、記述がポーランド人を対象としていることがよくわかるが、これらの情報、さらに文献学的な研究は、非ポーランド人のスラヴィストにとっても非常に興味深い。

続く「スラヴ語による文字とテキスト誕生の歴史的背景」と題された 2 章では、非スラヴ人とスラヴ人の歴史的関係、キリスト教会世界とスラヴ人（キリルとメトディの活動）について、そして各スラヴ人の民族史、社会史が解説されている。これらの知識は文献そのものの理解というよりも、文献理解の背景となる必要最低限の知識である。なお、Moszyński 氏は、最初期のスラヴ人やポーランドの歴史については、主に Henryk Łowmiański の歴史研究が土台になっている。

第 3 章は「テキスト」である。テキストは文献研究の根本的な土台のひとつである。この章では、まず古代教会スラヴ語のテキストの書かれ方について、例えば省略などの基本的読み方、教会スラヴ語の規範の概念などについて詳しく書かれている。続いてテキストの分類と、その種類別の解説が行なわれている。最初に宗教的テキスト、そして世俗的テキストの分類と解説が続く。ここでは、非常に多くのテキストの写真や写しが載せられていて、それぞれギリシャ語のオリジナルも含め、選文集としても用いることができる。

第 2 部は、スラヴ語史の概説がなされている。第 1 章では、スラヴ祖語についてである。まず、祖語再建の方法論、印欧語比較文法の基礎などスラヴ祖語理解のための最低限の知識が簡潔に述べられている。また、言語学的視点によるスラヴ人の由来、スラヴという名前の由来、スラヴ人の居住地といった現代まで議論が続く問題にも触れられている。ここでは多くの学説、主に 20 世紀のポーランド人研究者（Tadeusz Lehr-Splawiński, Kazimierz Moszyński, Henryk Łowmiański, Witold Mańczak など）の説を紹介し、必要に応じて具体的な批評を加えている。しかし、なぜか Zbigniew Gołąb のドニエプル中流以西説には言及されていない。⁵ なお、O. H. Трубачев が提唱するドナウ説は、ここで紹介されているが、

⁵ Z. Gołąb, *The Origins of the Slaves. A Linguist's View* (Ohio, 1992). を参照されたい。尚、本書は最近ボ

Moszyński氏はТрубачев説の具体的な問題点を挙げることなしに、この説に対する否定的な態度を示している。これは残念である。

これらの議論の後に、スラヴ祖語の具体的な言語学的特徴づけが続く。音韻論・音声学と形態論（名詞、形容詞、数詞、代名詞、動詞）である。音韻論・音声学は、初心者にもわかりやすい説明で要点が抑えてある。なお、Moszyński氏は、いわゆる「ボードワン口蓋化」、すなわち「第3口蓋化」は「第2口蓋化」よりも後に生じたという前世紀初頭からの伝統的な説に従っているが、「第3口蓋化」の相対的年代には諸説あることはよく知られている。例えばHorace Luntは「第3口蓋化」がスラヴ祖語最古の口蓋化である可能性を指摘したことは有名であり、⁶ 最近でもクロアチアの研究者Milan Mihaljevićのスラヴ語比較文法においてもLuntの説は支持され、比較的詳しく取り上げられている。⁷ また、A.A. Зализнякの古代ノヴゴロド方言の最新研究によれば、この方言では「第2口蓋化」が全く見られず、「第3口蓋化」はk以外では一定の法則で変化しないことから、「第2口蓋化」の方が「第3口蓋化」よりも新しい現象であろうという仮説に達している。⁸ 従って、ここでは根拠のある一説として、この相対年代についての見解にも触れてあったほうが良い。

この本の音韻論、形態論の充実の度合いを考えると、統語論はほぼ扱われていない点に気づく。一部の格支配については前置詞と動詞に限定した上で記述され、またギリシャ語からの統語的借用表現などについての解説があるのみである。なおMoszyński氏は前置詞sъが造格と生格とのみ結合するかのようになっているが、これには注意を要する。というのは、この前置詞は対格と結合することが現代のスラヴ諸語においても、古代教会スラヴ語においても知られているからである。Wenzel Vondrákの古典的研究によれば、この前置詞と対格の結合は、1) 何らかの事象が生じる場所（例：*opľčaje se sъ oba poly*）、2) 大体の大きさや数量（例：*na léto se sъ tri smokvi rodi*）という二つの意味を持ちうるという。⁹

第4章は「教会スラヴ語」と題されている。具体的に解説されるのは、スラヴ祖語から各スラヴ語への分化と発展、続いて正教圏の共通文語としての古代教会スラヴ語、そしてその文法的特徴が解説であり、個々の教会スラヴ語の成立とその運命についても説明されている。Moszyński氏は、学問に携わるものはその学問の歴史も知る必要があると述べ、

ーランド語訳も出た。*O pochodzeniu Słowian w świetle faktów językowych* (Kraków, 2004).

⁶ H. G. Lunt, *The Progressive Palatalization of Common Slavic* (Скопје, 1981). を参照されたい。

⁷ M. Mihaljević, *Slavenska poredbena gramatika* (Zagreb, 2002). pp. 162-166 を参照されたい。

⁸ Зализняк А.А. Древненовгородский диалект. М., 2004. С.45-47. を参照されたい。

⁹ W. Vondrák, *Vergleichende Slavische Grammatik II* (Göttingen, 1928). p. 315. ただし、別の研究者、例えば André Vaillant は Vondrák が挙げる 1 番目の意味は触れず、2 番目の意味のみを挙げている。A. Vaillant, *Grammaire comparée des langues slaves, tome V. La syntaxe* (Paris, 1974). p. 147. また、この問題については Chr. S. Stang, “Slavonic sъ with the Accusative in Expression of Measure,” in *Opuscula linguistica* (Oslo, 1970). pp. 104-109 も参照されたい。

古代教会スラヴ語研究の歴史も簡潔に説明している。これは当然評価できる点ではあるが、その一方でそのテーマだけでも分厚い本が書けるほどである。したがって歴史上最も重要な著書、出来事に限定されることになるが、本書ではなぜかAugust Schleicher, Antoine Meilletといった研究者の貢献は触れられていない。著名なAugust Leskienの文法書以前にも、Schleicherの学問的な古代教会スラヴ語の形態論Die Formenlehre der kirchenslawischen Sprache (1852年刊)がある。これは印欧語比較文法の観点から古代教会スラヴ語を研究対象とした本で、この分野の研究史において重要な地位を占める一冊であろう。¹⁰

続いて各民族の教会スラヴ語の発展について、実際のテキストを例に挙げながら簡潔にまとめてあり、中にはスラヴ学の枠内では扱われることが少ないルーマニア正教会の教会スラヴ語についても簡潔に解説してある。なお、Moszyński氏は、セルビアの教会スラヴ語の伝統は15世紀に死に絶えてしまったかのように書いてあるが、実際には、この言語は細々とではあるが18世紀前半まで使用されていた。そして18世紀後半にロシアの教会スラヴ語をその公式の言語として採用し、今日に至っているのである。

全体を通して言えることは、本書が単なる知識の押し付けではなく、基礎からかなり高度な内容まで、常に具体的な材料をもとに説明し、分析し、多様な学説を批判的に紹介していることである。本書は「入門書」と銘打ってあるものの、内容的には大学1年時には現実的に理解がなかなか難しい点も多くある。例えばスラヴ祖語を巡る諸問題は、古代教会スラヴ語はもちろんのこと、方言も含めた現代スラヴ語全体を良く知り、さらには印欧語比較文法の包括的な知識なくして理解はできない。しかし学習・研究を進め、知識が増えてから本書に戻ると、戻る度に新たに理解が深められる、「入門」以降にも重要な参考図書となる射程の広い本である。

本書の改定はLeszek Moszyński氏にとって、おそらく最後の大きな仕事になったと思われる。2006年春、氏は77歳で他界された。このような名著を、スラヴ学を志す者、そしてスラヴ学の道を既に歩んでいる者に残されたことに感謝しつつ、氏のご冥福をお祈りする。

¹⁰ 例えばVatroslav Jagićは、Schleicherの明快かつ正確な記述ゆえに高い評価を与えている。Ягич И.В. История славянской филологии. СПб., 1910. С. 716.